

箱庭制作過程および説明過程に関する質的研究の試み

楠本和彦

〔抄録〕

箱庭制作過程および説明過程に関する調査的研究を行った。探索的研究として、箱庭制作面接1回分のデータを用いて、制作過程、説明過程、内省報告に関する詳細なデータをM-GTAで質的に検討した。①M-GTAを用いて、質的なデータから概念を抽出し、カテゴリー化した。各過程の詳細なデータから箱庭療法の特性や治療的に重要な要因を抽出することができた。また、各過程およびその関係の概要を把握することができた。②調査データに基づき、制作過程や説明過程の言動に関する主観的体験を明示化し、箱庭療法の特性や治療的要因を探索した。1)意識の多様性という意識の特性と、制作者-セラピスト間のコミュニケーションの意義に関して検討した。2)枠内のイメージと枠外のイメージに関して、内界(イメージ)と外界(現物)との関係性、図と背景、「おさめる」ことの諸観点から検討した。これらの検討を通して、本研究方法により治療的要因の探求が可能であることを確認することができた。さらに、③各過程の概念やデータが、箱庭制作面接の主観的体験や治療的要因を検討・説明する根拠として使用可能であることを確認できた。

キーワード：箱庭制作面接、主観的体験、治療的要因、調査的研究、M-GTA

I. 問題および目的

箱庭療法研究において、箱庭療法過程の事例研究は最も中心的な研究方法であり、非常に多くの事例研究とその知見が積み重ねられている。それに加え、近年、箱庭制作過程や作品の説明過程をより精緻に研究しようとする実証研究が報告されるようになった。箱庭療法過程の研究と箱庭制作過程の研究との差異は伊藤(2005)に以下のように挙げられている。箱庭療法過程を扱う事例研究では、箱庭作品の内容の系列的な把握と治療展開を追う視点が中心となる。それに対して、箱庭制作過程の研究は、ミクロな視点から制作者やセラピストが体験している世界(箱庭制作過程)を理解することであり、それが箱庭療法の実践には重要である(p.52)。しかし、石原(2003)は、箱庭制作過程の複雑な事象や要因(「構成の過程(作品の動き)」、制作者とセラピスト両者の「体験の過程(心の動き)」、両者の「関係性」、箱庭用具)ゆえに、その実証研究を臨床実践に結びつくように行うことが非常に困難であると指摘する(p.455)。

本研究のテーマ、研究方法と関連の深い、箱庭制作過程と説明過程に関する先行研究について検討する。まず、箱庭制作過程に関する実証研究を取り上げる。①石原（1999）では、制作者の主観的体験がPAC分析を用いて実証的に研究されており、制作者の主観的体験に焦点を当てることの意義がデータに基づいて明らかにされている。②一つのミニチュアでの箱庭制作により、制作者の主観的体験を際立たせようとする研究（石原,2003,片畑,2007,石原,2008）が報告されている。このようにミニチュアを一つに限定することによって、より厳密に箱庭制作時の主観的体験を記述・分析することが可能となり、一つのミニチュアを選び、置く過程（砂に触れたり、構成する過程も含む）に関する独自性の高い知見が示されている。③制作過程をビデオ録画するとともに質問紙やインタビューを用いて、制作者の主観的体験を詳細に記述し、そのデータから箱庭療法の治療的要因（立ち会いの意義、イメージと意識の関係、制作者と面接者との関係性、制作者の対目的コミュニケーション、制作者と素材の関係性）を探る研究（清水,2004,伊藤,2005,中道,2010）が成されている。あるいはその主観的体験の変容そのものに治療的要因があるとする研究（石原,2008）が報告されている。これらの研究から、そのデータ収集方法の有効性ととともに、詳細な実証的データに基づいた研究法による箱庭制作過程研究の意義が示されている。

一方、箱庭療法の説明過程に関する実証研究は希少である。平松（2001）は、箱庭療法面接のための体験過程スケールを作成し、そのスケールにより制作者と面接者との説明過程を評定している。また、楠本・丹羽（2009）は、箱庭制作面接の説明過程に関する言語学・臨床心理学の学際的研究を実施している。これらの研究は、箱庭療法の説明過程に焦点を当てた数少ない研究であるが、通常の箱庭療法では使用されない理論・概念やスケールを使用しているところに、研究としての独自性と同時に特殊性がある。

上述の先行研究により明らかになった、研究の意義と問題・課題を踏まえた上で、本研究では、①通常の箱庭療法にできる限り近い形の調査状況（ミニチュアの使用制限をしない。8回または10回という継続的な面接とする）を設定し、その研究成果を箱庭療法に一般化可能なものとする、②箱庭制作過程および説明過程の詳細で実証的なデータ（ビデオデータと主観的体験のデータ）に基づいた研究であること、③箱庭療法のセラピストの視点や感覚が活かされる分析方法を用いること、の三点を重視した。そこで、録画された箱庭制作過程、説明過程のビデオデータと内省報告を精緻に分析する質的研究を行った。

本稿は、本研究で得た全調査データの内、箱庭制作面接1回分のデータを用いた探索的研究である。本稿は、以下の二点を目的とする。①調査データに基づき、制作過程や説明過程の言動に関する主観的体験を明示化し、箱庭療法の特性や治療的要因を探索する。②限定的なデータを用いた今回の探索的研究により、今後実施予定である、全調査データを用いたより包括的な研究の意義や可能性を展望する。

Ⅱ. 調査目的・調査方法・調査参加者

Ⅱ-1. 調査目的

本稿のデータとなった調査は、箱庭制作過程と説明過程における、①制作者の主観的体験の明示化、②箱庭制作・説明過程の治療的要因の探求、を目的として行われた。

Ⅱ-2. 調査方法

調査は、以下の1)と2)の面接と、全過程をふりかえるための面接から構成された(図1)。

時間経過		約2週間		約2週間		約2週間				約2週間		1ヵ月 数ヵ月	
調査活動内容	(第1回) 箱庭制作面接 告作成	VTR視聴・内省報告	(第1回) ふりかえり面接		(第2回) 箱庭制作面接 告作成	VTR視聴・内省報告	(第2回) ふりかえり面接	(中略)		箱庭制作面接(最終回) 告作成	VTR視聴・内省報告	(最終回) ふりかえり面接	全過程のふりかえり面接 (1回または数回)

図1 調査の流れ

1) 箱庭制作面接

この面接では、通常の箱庭療法面接と同様の箱庭制作過程と説明過程に、調査目的のための言語化の過程が追加されている。そのため、説明過程は以下の2つの過程から構成された。①自発的説明過程(通常の箱庭療法の説明過程と同様の過程)、②調査的説明過程(調査のため、通常の箱庭療法に比べれば、より積極的に質問ややりとりを行い、制作者の言語化を促す過程)。1回の時間は制作過程・両説明過程を含めておよそ1時間～1時間30分。この過程はビデオ録画された。

2) 箱庭制作面接のふりかえり面接

ふりかえり面接は、箱庭制作面接における制作者の主観的体験を、調査者と共有するとともに、その内容を明確化するために行われた。ふりかえり面接は、箱庭制作面接の約2週間後に実施された。箱庭制作面接のビデオを制作者・調査者が視聴し内省報告を書き綴った。ふりかえり面接では、制作者が内省報告を行い、調査者と共有化するとともに、明確化すべき点に関して確認した。その会話は録音された。

内省報告の内容、様式を以下に示す。

1) 箱庭制作に関する項目(表1参照)

以下の5要因(①ミニチュアの選択、②ミニチュアを置く、③砂の造形、④位置、ミニチュア、造形の変更、⑤セラピストの存在・行動)それぞれについて、4カテゴリー(①意図、②感覚・感情・イメージ、③連想、④意味)に関する内省報告を記述した¹⁾。

表 1 箱庭制作に関する項目内省報告例（【制作過程 (13)】一部抜粋）

時刻	制作過程内容	意図	感覚・感情・イメージ	連想	意味
27:00	壺を選び、波打ち際奥の方に半分うずめ、砂をかける。	サンゴを棚に戻しに行ったら、壺が視野に入った。「あ、これも置こう」と思った。ガラスの壺の蓋をあけようか迷ったが、閉まったままにした。	青い壺とガラスの壺。青いのは色と形はいいが大きすぎる。ガラスの壺は大きさは手ごろだが、透明で中が見えてしまうのがちょっと引かかっていた。		制作終了後の話し合いで、th から「そういう物があるって気づいてるんだ」と言われ、

2) 説明過程に関する項目

制作者やセラピストの言動について、4 カテゴリー（①意図、②感覚・感情・イメージ、③連想、④意味）に関する内省報告を記述した¹⁾。

II -3. 調査参加者

本調査の箱庭制作者は以下の2名であった。①A氏（40代女性）：箱庭制作面接およびふりかえり面接（各10回）、全過程のふりかえり面接（4回）²⁾。②B氏（40代男性）：箱庭制作面接およびふりかえり面接（各8回）、全過程のふりかえり面接（1回）。

両調査参加者とも、心理的問題を解決するために、箱庭療法を希望したのではない。A氏は自己実現、自己成長のために面接を希望し、B氏は心理療法家としての教育分析のために面接を希望した。そのような申し出があった際、筆者は一つの選択肢として、本調査参加者として箱庭制作を10回程度継続的に実施することができることを伝え、両氏がそれを選択した。このような両調査参加者を調査対象としているため、木下（2007）の修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下M-GTA）でいうところの分析焦点者は、「自己理解、自己実現、自己成長を目的として箱庭制作を実施した心理的に健康な制作者」となる。

III. 分析方法

本稿は、調査参加者①（A氏）の初回面接のデータを分析した。制作過程における箱庭の構成、制作者の言動、説明過程における言動のデータと臨床的特徴を抽出するため、ビデオ分析を行った。また、主観的体験のデータと臨床的特徴を抽出するため、内省報告の分析を行った。

III -1. ビデオ分析

1) 基礎資料の作成

ビデオを視聴し、制作過程での箱庭の構成や制作者の言動をできる限り現象に忠実に記述した。説明過程での会話を逐語記録化するとともに、特徴的な行動をできる限り現象に忠実に記述した。そして、制作過程、自発的説明過程、調査的説明過程および内省報告の各データの関連を探るために、17の制作過程にデータを分類した。

2) 質的分析

1)で作成した基礎資料を基に、探索的に、調査参加者①初回面接の制作過程、自発的説明過程、調査的説明過程のデータを、M-GTAに従い、質的分析を行った。それぞれの過程毎に、分析ワー

クシートを作成し、暫定的にカテゴリーを作成した。

Ⅲ-2. 内省報告の分析

1) 基礎資料の作成

内省報告は時系列で報告された。初回面接では制作者は、17の制作過程、5の自発的説明過程、14の調査的説明過程に対して内省報告した。これを基に制作者の内省報告の制作過程に対して時系列で(1)から(17)まで番号を付した。3過程(制作過程、自発的説明過程、調査的説明過程)の内省報告の比較を可能にするため、3過程の内省報告を同一の制作過程ごとに分類し、再構成した。

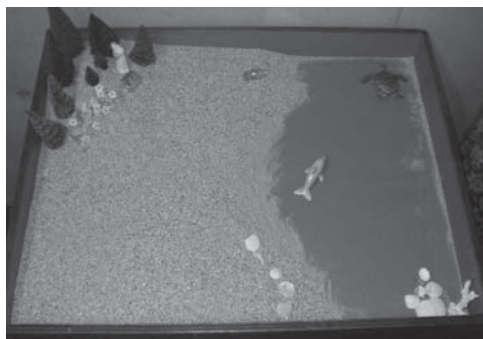


図2 第1回箱庭作品

2) 質的分析

1)で作成した資料を基に、探索的に、調査参加者①初回面接の内省報告のデータを、M-GTAに従い、質的分析を行った。分析ワークシートを作成し暫定的に、カテゴリーを作成した。

Ⅳ. 結果

Ⅳ-1. 結果の提示に関して

本稿は、目的に従い、調査参加者①初回面接(図2にその箱庭作品を示す)のデータを基に、概念、カテゴリーを抽出した。しかし、これらの概念、カテゴリーは本研究で得た全データの内、一部のデータから抽出された暫定的な概念、カテゴリーにすぎず、今後、データの追加により、修正される可能性は十分にある。そのため、本稿では、全概念を詳述することは行わず、考察・検討される概念のみを結果として詳述する。カテゴリー名には、各過程において同一のものがある。どの過程のカテゴリーであるかを区別できるように、異なるアルファベットで記された(例:カテゴリー名【箱庭の装置を

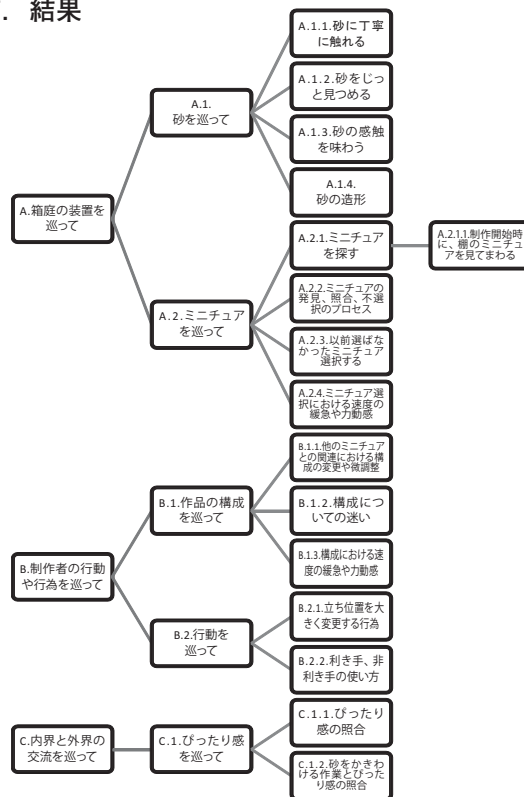


図3 暫定的カテゴリー (制作過程)

巡って】は制作過程では A, 自発的説明過程では D と記された)。

IV -2. 制作過程に関する暫定的カテゴリー

ビデオ分析では,制作過程における制作者の言動をできる限り現象に忠実に記述した。そのデータに基づいて,制作過程では,16個の概念,3個のカテゴリー【A. 箱庭の装置を巡って】,【B. 制作者の行動や行為を巡って】,【C. 内界と外界の交流を巡って】が抽出された。図3に制作過程における暫定的カテゴリーを示す。

IV -3. 自発的説明過程に関する暫定的カテゴリー

ビデオ分析では,自発的説明過程における会話を逐語記録化するとともに,特徴的な行動をできる限り現象に忠実に記述した。そのデータに基づいて,自発的説明過程では,20個の概念,5個のカテゴリー【D. 箱庭の装置を巡って】,【E. 制作者の行動や行為を巡って】,【F. 内界と外界の交流を巡って】,【G. セラピストとの関係性を巡って】,【H. 説明を巡って】が抽出された。図4に自発的説明過程における暫定的カテゴリーを示す。

制作過程のカテゴリーと比較すると,自発

的説明過程にはなく,制作過程に現れたカテゴリーは,【A. 箱庭の装置を巡って】内の【A.1. 砂を巡って】のカテゴリーと,【B. 制作者の行動や行為を巡って】内の【B.2. 行動を巡って】であった。反面,制作過程にはなく,自発的説明過程に現れたカテゴリーは,【G. セラピストとの関係性を巡って】と【H. 説明を巡って】であった。

IV -4. 調査的説明過程に関する暫定的カテゴリー

ビデオ分析では,調査的説明過程における会話を逐語記録化するとともに,特徴的な行動を

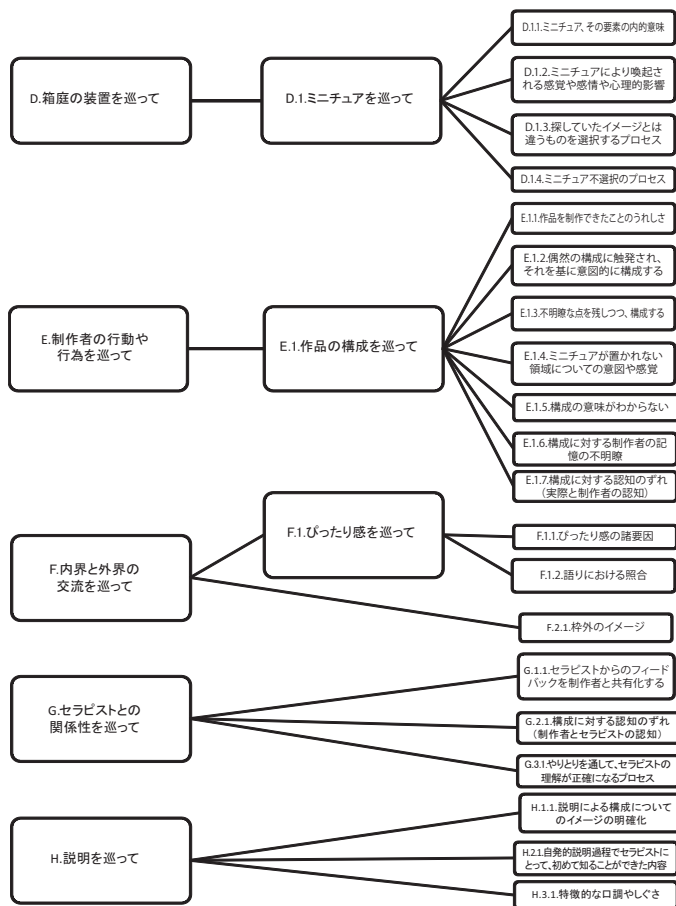


図4 暫定的カテゴリー (自発的説明過程)

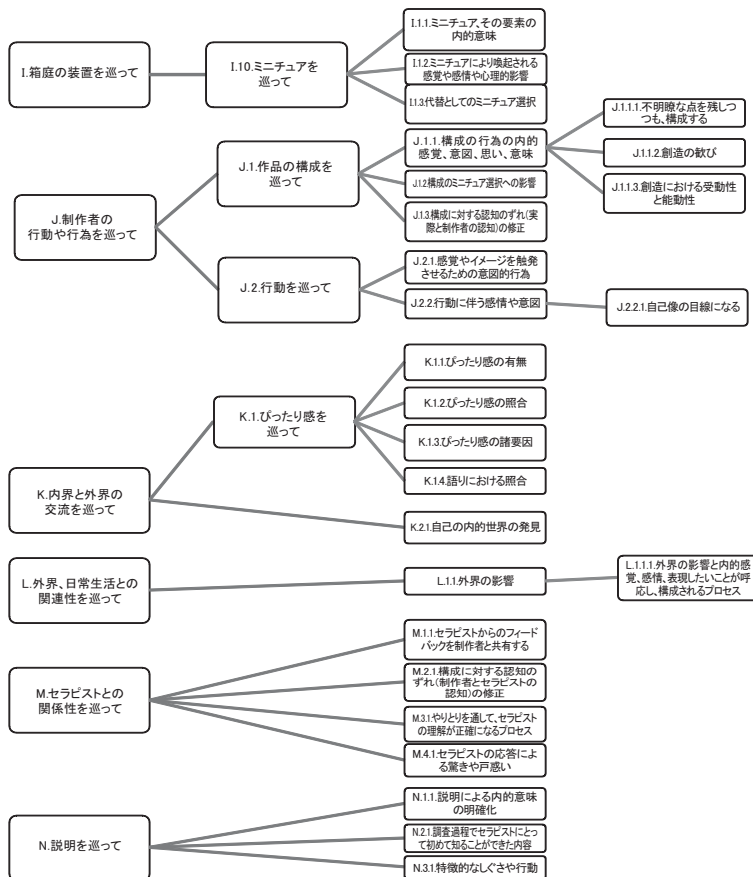


図5 暫定的カテゴリー (調査の説明過程)

できる限り現象に忠実に記述した。そのデータに基づいて、調査の説明過程では、26 個の概念、6 個のカテゴリー【I. 箱庭の装置を巡って】、【J. 制作者の行動や行為を巡って】、【K. 内界と外界の交流を巡って】、【L. 外界,日常生活との関連性を巡って】、【M. セラピストとの関係性を巡って】、【N. 説明を巡って】が抽出された。図5に調査の説明過程における暫定的カテゴリーを示す。調査の説明過程は、制作過程や自発の説明過程と比べた場合、カテゴリー、概念ともにやや増加している。制作過程にあり、調査の説明過程にないカテゴリーは、【A. 箱庭の装置を巡って】の【A.1. 砂を巡って】であった。自発の説明過程にあるが、調査の説明過程にはないというカテゴリーは存在しなかった。反面、制作過程になく、調査の説明過程に現れたカテゴリーは【L. 外界,日常生活との関連性を巡って】、【M. セラピストとの関係性を巡って】、【N. 説明を巡って】であった。自発の説明過程になく、調査の説明過程に現れたカテゴリーは【J.2. 行動を巡って】、【L. 外界,日常生活との関連性を巡って】であった。

IV -5. 内省報告に関する暫定的カテゴリー

内省報告では、32 個の概念、8 個のカテゴリー【O. 箱庭の装置を巡って】、【P. 制作者の行動

箱庭制作過程および説明過程に関する質的研究の試み（楠本和彦）

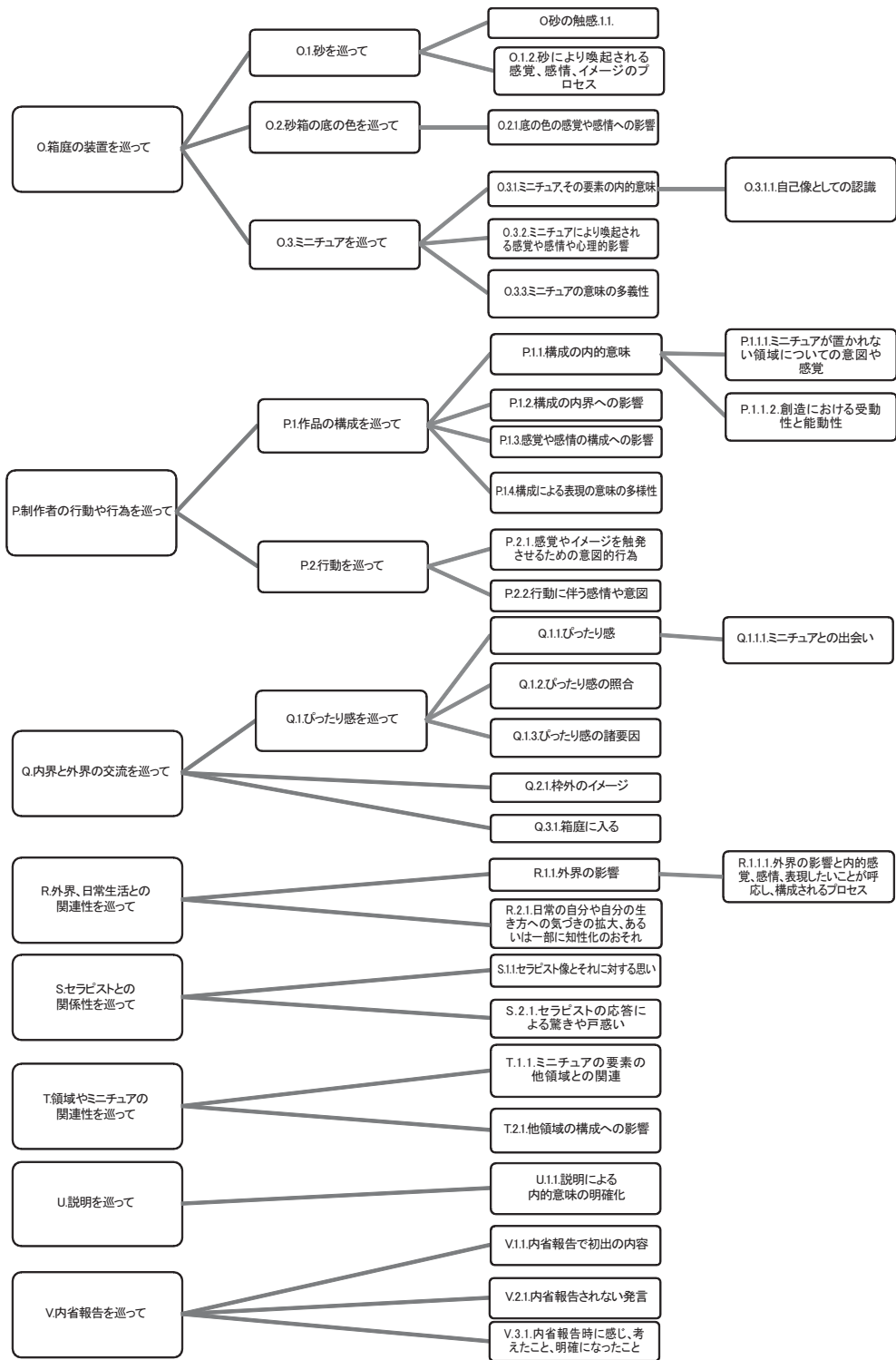


図6 暫定的カテゴリー（内省報告）

や行為を巡って】，【Q. 内界と外界の交流を巡って】，【R. 外界，日常生活との関連性を巡って】，【S. セラピストとの関係性を巡って】，【T. 領域やミニチュアの関連性を巡って】，【U. 説明を巡って】，【V. 内省報告を巡って】が抽出された。図6に内省報告における暫定的カテゴリーを示す。内省報告のカテゴリー，概念は，他の過程に比べて，数，種類ともに最も多い。その理由の一つには，内省報告は，制作過程，自発的説明過程，調査的説明過程それぞれに対して行われ，それがすべてこの概念のバリエーションとして扱われるという事情がある。

内省報告がなく，他の過程にはあるというカテゴリーは存在しない。逆に，内省報告にはあるが，他の過程にはないというカテゴリーは，【O. 箱庭の装置を巡って】内の【O.2. 砂箱の底の色を巡って】，【T. 領域やミニチュアの関連性を巡って】，【V. 内省報告を巡って】であった。

V. 考察

V-1. 箱庭制作・説明過程の言動と主観的体験との関連についての検討

本節では，本論の目的①「調査データに基づき，制作過程や説明過程の言動に関する主観的体験を明示化し，箱庭療法の特性や治療的要因を探索する」に関する検討を行う。本研究は探索的研究であり，暫定的なカテゴリーであるため，一部データを取り上げ，箱庭療法の特性や治療的要因を検討するに留める。そして，それらの検討を通して今後の研究の可能性を探ることを目的とする。この目的を達成するため，本調査研究各過程の内，主として，通常の箱庭療法でも実施される制作過程，自発的説明過程の言動や主観的体験のカテゴリー，概念，バリエーションを取り上げる。また，内省報告のデータをV-1-1.で示す限定付で補助的に取り上げる。制作過程に関しては自発的説明過程，調査的説明過程，内省報告の概念やデータを，自発的説明過程に関しては調査的説明過程と内省報告の概念やデータを，データの意味を検討・説明する根拠として使用した。

V-1-1. 各過程のカテゴリー内容の概観と比較

以下に，各過程のカテゴリー内容の比較を行う。これらのカテゴリーは暫定的なものであるため，これをもって箱庭療法全般に対する断定的な結論を出すことはできない。しかし，各過程のカテゴリー内容の比較を行っておくことで，可能性としての一つの傾向を把握し，今後，バリエーションの豊富なデータ（初回だけでなく，それ以降の回も含めたデータや複数の調査参加者のデータ）を取り扱う際の方向性を得ること，また，追加されたデータにより修正を施していくための基礎的な枠組みを得るという意義があると考えられる。

内省報告のカテゴリーや概念が他に比べて多く，網羅的である。これは内省報告という営みの独自性に加え，制作過程，自発的説明過程，調査的説明過程すべての過程についての内省が報告されるためであると推測される。調査的説明過程は次に数が多い。それは，自発的説明過程に比べて，セラピストがより積極的に質問，応答するためであろう。制作過程と自発的説明

過程は、前述の両者に比べると、カテゴリー、概念ともに数が多くない。

まず、通常の箱庭療法における過程である、制作過程と自発的説明過程の概要を検討する。制作過程と自発的説明過程のカテゴリーを比べると、制作過程にない【セラピストとの関係性を巡って】のカテゴリーが自発的説明過程には現れることが特徴的ある。また、逆に、【砂を巡って】と【行動を巡って】のカテゴリーは制作過程には現れるが、自発的説明過程にはない。

制作過程と説明過程のビデオ分析データは、VTR から、制作者の言動をできる限り現象に忠実に記述したものである。そのデータに基づいたカテゴリーや概念は、セラピストが詳細な観察を行えば、知ることが可能な制作者の言動に関する一連のまとまりである。【セラピストとの関係性を巡って】のカテゴリーが、制作過程では現れず、自発的説明過程で現れることは、箱庭療法の特性の一端を表わすものと言える。制作過程では制作者－セラピスト関係が必ずしも言動のレベルで明示的に現れるわけではないことを、このデータは示していると考えられる。制作者とセラピストとの間で言語的なコミュニケーションが実際に行われなければ、制作過程での制作者－セラピスト関係は言動レベルでは明示的にはならない。これは、箱庭療法では、制作者とセラピストとの関係性は重要であるにも拘らず、セラピストはなにもしていないとの誤解を受ける場合があることと関係していよう。箱庭制作で重視される関係性とは、言動のレベルでは明示的にならないものも含んだ、心理的な関係性であるためである。それに比べ、自発的説明過程では、制作者－セラピスト関係は言動のレベルにおいてより明示的になる。調査参加者①初回面接制作過程（14）では、制作者とセラピストとの会話により、セラピストの理解が促進されている（V-1-2.の2）で示す。制作過程（15）では、セラピストの気づきが制作者にフィードバックされ、構成に対する両者の認知のずれが明らかになっている（V-1-2.の1）で示す。このように自発的説明過程では、制作者－セラピスト関係が言動のレベルで明示的に表され、明示的な言動レベルでの関係性もまた箱庭療法の治療的要因の一つとして機能していることがわかる。

【砂を巡って】と【行動を巡って】のカテゴリーは制作過程には現れるが、自発的説明過程にはないことも箱庭療法の特性の一端を表わすものと言える。自発的説明過程は、制作者の語りを中心となり、制作過程のすべての要素が網羅的に示されるわけではない。その時点での制作者にとって、意識化しやすい要素、言語的に表現しやすい要素、語る価値があると感じる要素などに、言語表現が偏る可能性がある。調査参加者①の初回面接のデータでは、制作過程における砂を巡る行為、立ち位置を大きく変更する行為の自発的説明がない。この両カテゴリーの行為は制作者にとって意味の軽い行為とは言えないところが興味深い。制作者にとって意義深い行為であっても、砂を巡る行為や立ち位置の変更は、意識化、焦点化されにくい行為であると推測できる。

次に、自省報告の概要を検討する。自省は通常の箱庭療法においても起こりうる過程である。箱庭療法面接を思い出して、箱庭制作やセラピストとのやりとりをふりかえるということ

は、通常の箱庭療法でも起こりえる。しかし、①調査的説明過程が含まれる点、②VTRを視聴し、内省報告を記述する点が、本研究と通常の箱庭療法との差異である。これらの2点において、本研究の内省報告は、通常の箱庭療法における内省とは異なる要素を含んでいることを検討の際に留意する必要がある。他の過程にはなく、内省報告でのみ現れるカテゴリーは、【T. 領域やミニチュアの関連性を巡って】であり、【O.2. 砂箱の底の色を巡って】である。これらは、調査的説明過程においても取り上げられておらず、制作者、セラピスト両者共に言語化へ向けた動きがなされなかったことが伺える。これらの要因は、VTRを視聴し、再度、各過程を丁寧にふりかえったからこそ、意識化、言語化されたものであるかもしれない。そうであるならば、箱庭療法ではよほど丁寧に、繊細な意識化、言語化への動きがなければ意識化、言語化されないが、セラピーとして重要な要因や過程が組み込まれている可能性があることの証左と見ることできる。

V -1-2. ビデオ分析および主観的体験の明示化による箱庭療法の特性、治療的要因の探索

本節では、特定の過程に関するビデオ分析と主観的体験を明示化し³⁾、詳細な検討を行うことにより、箱庭療法の特性や治療的要因を探索する。亀とイルカを選び、砂箱に置く行為を巡る自発的説明過程での言動、該当する部分の制作過程、調査的説明過程、内省報告を主なデータとして取り上げ、検討する。

1) 意識の多様性 一直観的な意識と意味を認知する意識一

ここでは、箱庭制作における意識の特性と、制作者-セラピスト間のコミュニケーションの意義に関して、意識の多様性という観点から検討する。本稿では、「意味の認知を伴わないが、ぴったりだと感じることができる意識」を直観的な意識と呼び、意識の多様性を検討する際の一つの観点とする。

制作過程

28:57~29:06 イルカを持ち、やや右外側の方向に角度を微調整する (A氏, 1-(15), [C.1.1.])

29:06~29:15 イルカの角度を変えた後、その領域をじっと見つめる (A氏, 1-(15), [C.1.1.])

制作過程のデータは【C.1.1. ぴったり感の照合】のバリエーションとなっている。

自発的説明過程における説明

[E.1.7.] [G.2.1.] [V.2.1.] → 最終的にあの亀を見つけた時に、あ、どうもこう亀の方を見る感じだな、っていう。亀を見るんじゃないんだけど亀が視野にちゃんと入ってるなあそんな感じになってよかったなと思いましたね。 [E.1.7.] [E.1.6.] [G.1.1.] → <少し、亀を置いた後、置き換え、あの、方向変えたもんね>あ、そうでしたっけ<イルカも最初はもう少しこちらの方に、ちょっとだけ、ほんのちょっとだけ沖にいたんだけど、亀の方に(?) っ> [E.1.6.] [G.1.1.] [G.2.1.] [V.2.1.] (A氏, 1-(15), 自発[E.1.6] [E.1.7.] [G.1.1.] [G.2.1.] [V.2.1.])

調査的説明過程における説明

[J.1.3] [J.2.2] [J.2.2.1] [M.2.1] → もう一回その陸の方からみていいですか? [J.2.2] [J.2.2.1] <どうぞ。どうぞ> [N.3.1] → ふーん? <どんな感じがする?> (いや、こっちから見るとほんとにこうイルカがあつたの亀の方を向いているので、ああ、ぼっち向いてるなあと思って。[制作過程(15)の再確認]) [J.1.3] [M.2.1] [N.3.1] <中略> [M.2.1] [V.2.1] → <今なんかあつちの方から見たくなつたのは?> [J.1.3] [J.2.2] [J.2.2.1] [K.1.4] [M.2.1] [N.3.1] → (イルカの目線になリたかつたのかなあ。 [J.2.2] [J.2.2.1] [K.1.4] [N.3.1] <はあ、イルカの目線か。亀の方見てる。ね。亀の方見てるね>見えますね<視界に入っているというより、見ているというより視界に入っているってさっき言うてたけど、なんか、ぼっち見てるよね>ハッチリ見えますよね<そうだね> [制作過程(15)に関連]) [J.1.3] [M.2.1]

[V.2.1] <いいかな>あ、いいです。(A氏,1- 調査的説明過程の最後の再確認行動, 調査) (制作過程 15 に密接に関連している部分のみ抜粋)

自発的説明過程のこの部分に特徴的であるのは、構成に対する認知のずれや記憶の不明瞭である（【E.1.6 構成に対する制作者の記憶の不明瞭】【E.1.7. 構成に対する認知のずれ（実際と制作者の認知）】【G.2.1. 構成に対する認知のずれ（制作者とセラピストの認知）】⁴⁾）。制作者の説明、セラピストが観察した制作者の構成行為のフィードバックを通して、構成の事実と、制作者の認知と、セラピストの認知が一致しないという特性が明らかになる。制作者の「亀を見てるんじゃないんだけど亀が視野にちゃんと入ってるなあ」という説明にセラピストは違和感を覚えた。セラピストの観察ではイルカの視線はもっと直接的に亀に向かっていているように見えたためである。その視線の方向や方向の修正がイルカと亀との関係性を表わしていると、セラピストは推測していた。このデータに関連して、制作者は調査的説明過程で、制作過程に続き、再度、立ち位置を変え、箱庭の右側から作品を見る。そして、「イルカが亀の方をぱっちり向いている」と、自発的説明過程とは異なる認知を示している（【J.1.3 構成に対する認知のずれ（実際と制作者の認知）の修正】⁴⁾）。

内省報告

- * [Q.1.2][Q.1.3] → 亀の進む方向と、イルカの進む方向^{-[Q.1.3]}がずれているような気がして、^{-[Q.1.2]}イルカを置きなます。(A氏,1-(15), 制作・意図【Q.1.2】【Q.1.3】)
- * 少しの不安を感じながらも、^[P.1.1]自分の前を進む亀に、今はついていこうと思っているようだ。何より、広い海原で亀を見失ってしまったら、自分の進む方向を見失いそうだ。^{-[P.1.1]}(A氏,1-(15), 制作・意味【P.1.1】)
- * イルカの行く手に、得体の知れない何か、そのまま進んで大丈夫かな、というようなものを置こうと思っていたが、^[Q.1.1.1]^[O.3.2]ふと亀が目にとまり、^[O.3.1]得体の知れない何かのことが一瞬で頭から消えた。^{-[Q.1.1.1]}^[O.3.2] 亀は緑や黄色でイルカよりリアルな印象。^[O.3.1]イルカより知恵がありそうでイルカより腹が据わっているようだ。^{-[O.3.1]}^[O.3.2] 亀を見つけ、^{-[O.3.2]}^[P.1.2] 亀を箱庭に置いたことで、^[O.3.2]なんだかほっとする。^{-[O.3.2]} 安心して進んだらいいんだという気持ちになる。^{-[P.1.2]}(A氏,1-(14), 制作・感覚【O.3.1】【O.3.2】【P.1.2】【Q.1.1.1】)
- * ^[O.3.1]^[S.1.1] 亀は私にとっての th なのか。^{-[S.1.1]} それとも、私の中にある、ある部分なのかと思う。^{-[O.3.1]} イルカよりリアルで、年長にも感じる。亀についていった後の浦島太郎のことが思い起こされ、^[O.3.2]^[S.1.1]賢く導いてくれそうだけれど、信じて頼り切ってしまうといいのかという不安もある。^{-[O.3.2]}^[S.1.1] (A氏,1-(14), 制作・意味【O.3.1】【O.3.2】【S.1.1】) 【亀の先に、嫌なものはまだある】(自発的説明過程) という発言に関する内省報告
- * 私にとって(イルカにとって?) ^[O.3.2]^[P.1.1] 亀がとても頼もしく感じる。^{-[O.3.2]}^[Q.2.1] 嫌なものを私からさげぎってくれる。^{-[Q.2.1]} 導いてくれる感じ。^{-[P.1.1]} (A氏,1-(14), 自発・意味,【O.3.2】、【P.1.1】)【Q.2.1】)
- * ^[P.1.1] 亀は、私と ^[Q.2.1] 嫌なものの中に ^{-[Q.2.1]} 入ってくれて、私を守ってくれている。^[Q.2.1] 嫌なものに取り巻かれないように ^{-[Q.2.1]} してくれるものなのだと思う。^{-[P.1.1]} (A氏,1-(14), 自発・意味,【P.1.1】)【Q.2.1】)

制作過程 (15) に関する内省報告によると、亀の進む方向と、イルカの進む方向のずれに気づき、イルカを置き直したことが、制作者に明確に意識されている。しかし、その構成の内的意味の記述は、「思っているようだ」「見失いそうだ」とやや曖昧になる。制作過程 (14) に関する内省報告にも、イルカと亀に関する記述がある。制作過程 (14)、制作・意味には、「賢く導いてくれそうだけれど、信じて頼り切ってしまうといいのかという不安もある」と記されており、導くという要素が語られるものの、不安まじりで確信をもち切れない語り口となっている。それに対して、制作過程 (14)、自発・意味では、「嫌なものを私からさげぎってくれる、導いてくれる感じ」「亀は、私と嫌なものの中に入ってくれて、私を守ってくれている、嫌なも

のに取り巻かれないようにしてくれるものなのだと思う」という内的意味がより明確に、より確信をもって記される。ただ、注意すべきことは、制作過程(14)に関する自発的説明過程での発言(次項2)で具体的に示すは、1)における発言の後に、亀の性質や位置(「亀は、私と嫌なもの間に」)により焦点が当てられた内容として報告されており、本項で検討しているイルカの視線の方向に直接触れているわけではない。

上記のデータに、箱庭療法の一特性を見出すことができる。その特性とは、制作者は、箱庭を構成する際、必ずしもその構成の意味を意識しているとは限らないということである。もし「イルカが亀についてこうとしている」というイルカと亀の関係性が明確に意図されて制作されたのであれば、自発的説明過程で【E.1.6 構成に対する制作者の記憶の不明瞭】【E.1.7 構成に対する認知のずれ(実際と制作者の認知)】は起こり得ない。また、制作に関する内省報告で両者の方向やイルカの方向を修正したことについての内的意味についての報告が、もっと断定的になってよいはずである。制作過程や内省報告のデータによると、この制作過程において制作者が内的な感覚や感情に従って構成を行っていることは、確かである。しかし、このデータ部分では、その内的感覚や感情は構成の意味の認識に繋がっていない。

同様の特性は、制作過程(13)の壺の構成と認知にも見られる。制作者は壺を選び、壺に砂をかけるという行為を自覚的に行っている。「ガラスの壺の蓋をあげようか迷ったが、閉まったままにした。砂をかけて、少し前からそこにあったという雰囲気を出そうとした」(〈内省報告,A氏,1-(13),制作・意図〉)とあるように、制作者は構成に関して(蓋を開けるのか、閉まったままにするのかの選択、壺に砂をかけて、少し前からそこにあったという雰囲気を出す)、内的な感覚と構成とを自覚的に照合し、吟味している。また、壺の中身は「大事なもの」であることが、明確に意識化・言語化されている。一方、壺を拾い上げていないという構成や制作行為の「意味」について、制作者は調査的説明過程でセラピストからフィードバックされるまで意識していない(「制作終了後の話し合いで,Thから『そういう物があるって気づいてるんだ』と言われ、『そう、気づいていて、そのままにしてあるんだ』と思った。)<内省報告,A氏,1-(13),制作・意味〉)。このように、壺は中身や蓋の状態があいまいなままで、放置され続けられたものとして作られている。つまり、制作に関わる意識は、「大事なもの」があることを箱庭に表現しつつ、それをそのままにしていることと、その「意味」に気づいていない制作者の内的状態をも、非常に巧みに、ぴったりな形で表現している。

本項で取り上げたこれらのデータは、直観的な意識(「意味の認知を伴わないが、ぴったりだと感じるができる意識)の特性と関連している。ここで示された特性は、箱庭制作における意識のあり様や治療機序を示すものとして意義深いと考えられる。これらのデータにより、ぴったり感が含意的・象徴的意味の認知(光元,2001 p23-25)や内的意味の洞察とは異なる心の機能であるということが明示できた。箱庭制作では、ある場合には、ぴったり感に基づいて構成され、制作者による構成の意味の認知や洞察は必ずしも必要ではない。また、ある

場合には、含意的・象徴的意味が認知されていたり、内的意味が洞察される場合もある。このように、箱庭制作では、多様な意識のあり様が関与している。そして、このデータ部分で見出された、直観的な意識は、箱庭療法において、洞察が必ずしも必要とされないことや作品に対するセラピストの解釈を必要としないことについての証左の一つとすることができるだろう。

また、これらのデータは、制作者とセラピストとのコミュニケーションの治療的意義を示すものである。これらのデータは、①制作過程と説明過程における「いま・ここ」に十分に開かれていれば得ることができるが、完成した作品を見ているだけでは得ることができない。その点では、箱庭療法面接中に「いま・ここ」で起こっていることへのセラピストの感受性に関わることである。また、②自発的説明過程での制作者とセラピストとの会話が制作者へどのような影響を与えるのか、その一端が調査的説明過程で明示的になったものである、と見ることもできる。通常の箱庭療法では、説明過程におけるセラピストの制作者への影響は、言語化されず明示的にならない場合もあるが、本研究ではその一端が示された。

このデータから、セラピストの気づきのフィードバックが、①制作者が作品を再度吟味する行動を生み、②その行為が制作者の認知の変容につながったプロセスが明らかになっている。さらに、セラピストにそのような気づきが生まれた背景を含めると、制作者の構成行為や言動に対する、セラピストの関心や感受性がこのプロセスに関連していることがわかる。③セラピストが、制作者の言動の含意的・象徴的意味をも捉えようとしていることが、このデータにある展開を生んでいる。セラピストは亀とイルカとの関係性に関心をもっていた。イルカの方角を修正する行為のデータを用いてそれを表明した。実際に表明されたデータは、構成の事実であるが、その応答の背後には関係性という含意的・象徴的意味に対するセラピストの関心があった。先に、含意的・象徴的意味の認知ではなく、ぴったり感に基づいた箱庭制作に関して考察したが、④制作者とセラピストとの意識のあり様の差異やその差異に端を発したコミュニケーションが、箱庭療法の展開の一因となることが示されたと考える。箱庭療法のセラピストには制作過程、自発的説明過程での制作者の言動や主観的体験、セラピスト自身の主観的体験に対する豊かな感受性が必要だと言われる。上記データから、その証左の一端を示すことができたと考える。

2) 枠内のイメージと枠外のイメージ —おさめること—

本項では、枠内と枠外のイメージに関して、内界（イメージ）と外界（現物）との関係性、図と背景、「おさめる」ことの諸観点から、箱庭療法の特性や治療的要因を検討していく。

制作過程

27:53～28:15 海の生き物の棚のミニチュアを17秒間、見ている。(A氏,1-(14),[A.2.1])

28:15～28:47 亀を右手で選び、両手で持つ。角度を変え、様々な部分を確認する。亀を手にとったまま、22秒間他の棚のミニチュアを見る。(A氏,1-(14),[C.1.1])

28:47～28:51 亀をもって、箱庭に移動する。(A氏,1-(14),[C.1.1])

28:51～28:57 亀を右上隅に置く。一回で位置、方向が決まる。(A氏,1-(14),[B.1.3])

制作過程のデータは【A.2.1. ミニチュアを探す】【B.1.3 構成における速度の緩急や力動感】
【C.1.1. ぴったり感の照合】のバリエーションとなっている。

自発的説明過程における説明

以下のデータは、V-1-2.の1)の発言に続く部分である。

[D.1.3] [D.1.4] [H. 2.1] 「亀のとこにねー、なんか、もうちょっとこうわたしにとって嫌なもの(ほおー)を置こうと思って。嫌なものって言うか、ねえ。形のない、なんかこう、ものを置こうかと。まだよくわからない(?)置こうと思ったんですけどね。探しにいったら」
[H. 2.1] 「亀と目があつたんでくなるほど>あ、これはいいかもと思って、」
[D.1.4] 「それはちょっと嬉しかったです。」
[D.1.3] [G.3.1] 「<いや、形のない嫌なもの置こうかな、と思って、で、探しに行つて、亀と目が合つて、これがいいと思つた。>」
[D.1.3] 「あのね、あの爬虫類の棚あるじゃないですかあるねえ>あの、爬虫類とか、そのワニとか恐竜とかくああ。ああ>
あの辺にあるのかなと思つて行つたら、亀がいたのでなくなるほど>」
[D.1.4] 「こっちの方がいいで亀を置きました。」
[D.1.4] 「こっちの方がいいで亀を置きました。」
[H. 2.1] 「<それってなんか、」
[H. 3.1] 「その形のない嫌なものということだけではないわけか、じゃ、亀つて。>あ、亀と形のない嫌なものはイコールじゃないですね。」
[H. 3.1] 「<そうだよね>イコールじゃない、ぜんぜん別なもの。」
[D.1.3] 「<あ、ぜんぜん別なもの。>」
[F.1.2] 「た、多分ぜんぜん別なもの。」
[F.1.2] [F.2.1] 「なんか、こ、この亀の先に嫌なものはまだある。イメージとしてはねくあ、そんな感じなわけね>そんな感じ…ですね。」
[F.2.1] [D.1.4] 「嫌なものがあるのかもしれない。わたしにとっては、まだちょっと、置かないよ、つていう。」
[D.1.4] [G.3.1] [H. 2.1] (A氏,1-(14), [D.1.3] [D.1.4] [F.1.2] [F.2.1] [G.3.1] [H. 2.1] [H. 3.1])

自発的説明過程で、以下の内容が報告されている。元々は亀ではなく、「嫌なもの」「形のないもの」を置こうとして、「爬虫類とか、そのワニとか恐竜」の棚に行つた。しかし、「探しにいったら亀と目が」合い、「こっちの方がいい」と感じて、亀を選んだ。また、嫌なものは、亀の先にあるのかもしれないが、まだ置かない。しかし、それは無くなったのではなく、砂箱の枠外の「亀の先に嫌なものはまだある」こともイメージされている（【F.2.1. 枠外のイメージ】⁴⁾）。

該当の内省報告（A氏,1-(14)）はV-1-2.の1)に示した。内省報告によると、制作者あるいはイルカにとって、「亀がとても頼もしく感じる」存在である。また、イルカの前に、亀がおり、さらにその先には、実際には置かれていないが嫌なものがあるという位置関係に、「嫌なものを私からさげしてくれる、導いてくれる感じ」「亀は、私と嫌なものの間に入って来て、私を守ってくれている、嫌なものに取り巻かれないようにしてくれるものなのだと思う」という内的意味があることも明示的になっている。亀とイルカの位置関係は、イルカ（私）を守り、導く存在としての亀という内的な意味を持って構成されている。

上記のデータに、箱庭療法の特性を見出すことができる。第一に、ぴったり感が制作やイメージにおよぼす影響の大きさが示されている。亀を見つけたことで、思い浮かべていたイメージは一瞬で消え（【Q.1.1.1. ミニチュアとの出会い】⁴⁾）、予定されていなかったミニチュアにより構成される。そして、そのミニチュアは守り手、導き手という重要な役割を果たす。このようなイメージが生まれ、ミニチュアが置かれたことにより、旅立ちと旅の進行に対する不安は安心に変化した。それはセラピストや自分の内的導き手との関係性への気づき（「知恵があり」、「頼もしく感じる」）を与えることにもなっている。このように、箱庭療法では、内界と外界との交流が重要な治療的要因となることが明らかになる。ミニチュアとイメージのぴったりした出会いは内界に変容を生んでいる。自分にとって重要なイメージとの出会いが、構成という外的現実をも大きく変えるほどの影響力をもっている。また、このようなイメージの過程を経

ることで、制作者は「自由であると同時に保護された空間」を感じることができた。

第二に、砂箱の枠外にまで内的イメージが広がっているという、枠とイメージとの関連が示されている。最初、制作者は、「嫌なもの」をイルカの行く手にある得体の知れない何かとして、砂箱の中に置くつもりで探そうとした。それは亀を見つけ、置いたことで、砂箱には置かれなかった。しかし、「亀は、私と嫌なものの中に入って来て、私を守ってくれている、嫌なものに取り巻かれないようにしてくれるもの」と内省報告にあるように、「嫌なもの」はイメージとして内的には確実に存在している（【Q.2.1. 枠外のイメージ】⁴⁾）。このように、箱庭療法では、実際に置かれたミニチュア以外にも、実際には置かれていないものが内的イメージとして存在し、内的過程に影響を与える可能性があることがわかる。このデータもまた、箱庭療法におけるイメージと現物との関係性に関与している。箱庭の枠という現物は、イメージの構成に限定を及ぼす。しかし、内的イメージはその限定を越えて存在することも可能なものであり、その実際には置かれていないイメージから制作者は影響を受けている可能性がある。

上記のように、このデータは箱庭療法における内界（イメージ）と外界（現物）との関係性を示している。現物の枠によって切り取られた外には、現物のミニチュアは置かれていない。しかし、内的イメージでは、現物の枠を越えたところに、イメージが確実に存在し、それが内的過程に影響を与えている。現物の枠の内にあるミニチュア（亀）は重要な役割（守り手、導き手としての内的意味）を担い枠内に存在し、内的過程に影響を与えている。そして、このミニチュア（亀）は、もう一つの存在（嫌なもの）を枠外に追いやった原因となっている。このデータ部分に表れている砂箱の枠の内と外との関連をどのように考えることができるだろうか。箱庭療法では、ある回に、全体の構図の一部分だけが制作される場合がある。そのような場合、作られなかった他の部分は存在しないのではなく、その回で取り扱われている領域のみが砂箱内に表現されている、または、ある部分に焦点が当たっているが、他の部分は意識の背景に沈んでいると考えることができる。このデータ部分も同様に、枠内＝意識の図、枠外＝意識の背景（地）と捉えることは可能だろうか。嫌なものは、内省報告にあるように、意識されている。だから、完全に意識の背景となっており、容易に図地反転しないということではない。しかし、「嫌なものがあるのかもしれない。わたしにとっては、まだちょっと、置かないよ、っていう」と、自発的説明過程で語られているように、嫌なものはやはり、現在のところ枠内には置かない、置けないものなのである。内省報告のデータも、強調点、焦点は亀にあり、亀の役割、意味の説明のために、嫌なものが語られていると見ることもできなくはない。このような点から、嫌なものは、確かに意識内に存在するが、今回は中心的な存在として焦点を当てられてはいない、そして、亀とイルカとの関係の中で意識されている、図地反転可能な背景という特性をもっている、と見ることはできるのではないか。

また、このデータ部分は、箱庭療法における「おさめる」という特性とも関連していると見ることができる。石原（2008）は、主観的体験と砂箱の枠に関して考察する中で、砂箱が物理

的な制限でありながら同時にまるで制限がないかのように自由に広がっていくようにも体験されるといふ点、そのように体験することを可能とする制作者の心の働きが、砂箱を「自由であると同時に保護された空間」にしているとする (p.227)。石原の研究・考察を参照し、このデータ部分を見た時、上記のデータは箱庭療法の治療機序の一つとして挙げられる「おさめる」ことと関連しているように思われる。亀がイルカの導き手、守り手として枠内に存在すると同時に、嫌なものは内的イメージとして枠外にあってこそ、制作者はびったり感をもつことができている。そのように構成することができたからこそ、砂箱内の構成は、砂箱内におさまるものとなったと考えることができよう。箱庭制作における構成、びったり感、意識の図と背景との関連で考えると、箱庭療法において「おさめる」ためには、意識の図に当たるテーマを箱庭の中に表現すると同時に、図から外れたものに対して、実際の表現を与えず、かつ、内的イメージとして保持することが必要とされる、と言えるのではないか。そのようにできることで、構成全体にびったり感が生まれ、「おさめる」ことが可能となる。

さらに、1)で検討した特性と総合して考えると、箱庭制作において特徴的で、興味深いことは、その図として表現された枠内の構成の中にも 1) で示したように、制作者自身が気づいていない要素が含まれることである。単純に枠内=図ではなく、枠内には意識され、図として焦点が当たっているものと同時に、制作者自身にもその意味が気づかれていない構成やミニチュアが存在しうる。箱庭制作はそのような意識の多様性を包含した行為であると言える。そのような特性が、意識と無意識との協同作業による創造性が成立する一つの要因と考えられる。

V-2. 包括的な研究へ向けての意義、可能性

本稿の目的②「限定的なデータを用いた今回の探索的研究により、今後実施予定である、全調査データを用いたより包括的な研究の意義や可能性を展望する」について、検討する。本稿では、探索的研究として、箱庭制作面接1回分のデータを用いて、制作過程や説明過程の言動に関する主観的体験を明示化し、箱庭療法の特性や治療的要因を探索した。結果に示したように、M-GTAを用いて、各過程において、概念を抽出し、暫定的なカテゴリーを作成した。それにより①質的なデータから概念を抽出し、カテゴリー化することを通して、各過程の詳細なデータから箱庭療法の特性や治療的に重要な要因を抽出することができた。また、各過程およびその関係の概要を把握することができた。②箱庭制作面接ではたとえ1回であっても、そこには質・量ともに豊かな主観的体験が生まれていることを明示できた。③詳細なデータを用いた検討を通して、箱庭療法の治療的要因を、1) 意識の多様性、2) 枠内のイメージと枠外のイメージの観点から検討し、治療的要因探求の可能性を確認することができた。④各過程の概念やデータが、箱庭制作面接の主観的体験や治療的要因を検討・説明する根拠として使用可能であることを確認できた。制作過程に関しては自発的説明過程、調査的説明過程、内省報告の概念やデータが、自発的説明過程においては調査的説明過程と内省報告の概念やデータが、データの意味を検討・説明する根拠として使用可能であることを、考察を通して確認できた。以上

が、探索的研究により見出すことができた、包括的研究に向けての意義や可能性である。

〔注〕

- 1) 内省報告の項目は調査者が設定した。時刻,制作過程内容(説明過程では会話内容)と各カテゴリー(①意図,②感覚・感情・イメージ,③連想,④意味)の項目名のみを記したエクセルファイルに制作者は内省報告を記入した。
- 2) 本調査研究は,2008年1月21日に南山大学研究倫理審査委員会の承認を受けている。
- 3) 下線は以下のように区別されている。概念1個のみが該当_____,概念2個が該当_____,概念3個以上が該当_____。→と←はそれぞれ概念のバリエーションの始点と終点を示す。<>内はセラピストの発言。
- 4) 本稿で取り上げた主な概念の定義を以下に示す。【】内に概念名を,続いてその定義を記す。【E.1.6. 構成に対する制作者の記憶の不明瞭】構成に関して,制作者の記憶が不明瞭であること,【E.1.7. 構成に対する認知のずれ(実際と制作者の認知)】構成に関して,実際の構成と制作者の認知が一致していない,【F.2.1. 枠外のイメージ】箱庭の枠の外にも(実際に置かれていない),イメージを膨らませ,それに気づいている,【G.2.1. 構成に対する認知のずれ(制作者とセラピストの認知)】構成に関して,制作者の認知と制作者の認知が一致していない,【J.1.3. 構成に対する認知のずれ(実際と制作者の認知)の修正】構成に関して,実際の構成と制作者の認知が一致していない状態が,再確認することで修正されるプロセス,【Q.1.1.1. ミニチュアとの出会い】ミニチュア選択時における,ぴったり感の様態。「出会えた,見つけた」という感覚や感情を伴った,ミニチュア選択,【Q.2.1. 枠外のイメージ】箱庭の枠の外にも(実際に置かれていない),イメージを膨らませ,それに気づいている。

〔引用文献〕

- 平松清志(2001)箱庭療法のプロセス—学校教育臨床と基礎研究一,金剛出版
- 伊藤真理子(2005)イメージと意識の関係性からみた箱庭制作過程,箱庭療法学研究,17(2),pp.51-64
- 石原宏(1999)PAC分析による箱庭作品へのアプローチ,箱庭療法学研究,12(2),pp.3-13
- 石原宏(2003)箱庭制作過程に関する基礎的研究—「一つのミニチュアを選び,置く」という箱庭制作の数量的データの検討一,京都大学大学院教育学研究科紀要,49,pp.455-467
- 石原宏(2008)制作者の体験からみた箱庭療法の「治療的要因」に関する心理臨床学的研究,平成17・18・19年度科学研究補助金若手研究(B)研究成果報告書
- 片畑真由美(2007)箱庭制作における制作者の「体験」についての考察—調査の枠内で見られた一事例から一,岡田康伸・皆藤章・田中康裕(編)京大心理臨床シリーズ4箱庭療法の事例と展開,pp.70-79,創元社
- 楠本和彦・丹羽牧代(2009)制度的場面における言語運用の専門性について—箱庭療法における言語セッションのケース一,南山学会機関誌アカデミア人文・社会科学編,88,pp.93-123
- 光元和憲(2001)箱庭療法へのいざない,光元和憲・田中千穂子・三木アヤ体験箱庭療法Ⅱ,山王出版
- 中道泰子(2010)箱庭療法の心層—内的交流に迫る一,創元社
- 清水亜紀子(2005)箱庭制作場面への立ち会いの意義について—ビデオ記録を用いたプロセス研究の試み一,箱庭療法学研究,17(1),33-49

(くすもと かずひこ 臨床心理学専攻博士後期課程)

(指導:東山 弘子 教授)

2010年9月29日受理